

目次

はじめに	i
凡例	xv
第1部 物語文学における心の表象——源氏物語を中心に	1
序	3
第1章 物語文学に表象される心の特質	4
第1節 物語文学における心	4
第2節 規範的・類型的な心情と場面	6
第3節 「思ふ」という行為の特殊性	8
第2章 心の言葉としての心内語	10
第1節 心内語とは何か	10
第2節 心内語を生成する語り手	16
第3節 語り手による心内語の操作	20
第4節 心内語という表現の意義	25

第3章	物語の展開と心内語の働き	28
第1節	末摘花巻——「開かれ」ていく心と回想の重なり	29
	1 末摘花巻とは…29	
	2 「開かれ」ていく末摘花の心と読者…29	
	3 夕顔を思い出しながら…31	
	4 結び…33	
第2節	明石巻——物語の交差、神と人間の交感	34
	1 明石巻とは…34	
	2 物語の交差の二層…34	
	3 神に支配される入道の心…37	
	4 結び…38	
第3節	朝顔巻——多様に形象される源氏の心	39
	1 朝顔巻とは…39	
	2 付度で示される心…39	
	3 源氏の思考の受動性…40	
	4 巻末の夢は、本当に夢か…42	
	5 この「夢」の意義…46	
	6 結び…48	
第4節	夕霧巻——物思いを引き起こす仕組み	49
	1 夕霧巻とは…49	
	2 知ることができないという妨げ…50	
	3 当時の社会的性差という妨げ…51	
	4 親への情という妨げ…52	
	5 阻害を乗り越える夕霧…52	
	6 結び…54	
第4章	思うことと言うことの関係	55
第1節	思うが、言わない	55
第2節	思うことをそのまま言う	57
	1 複合動詞「思しのためふ」…57	
	2 「思しのためふ」との並立と対照…60	
	3 女君の切実な「思しのためふ」…63	
	4 自分に言い聞かせる朱雀院…65	
	5 「お気持ち」としての遺言…67	
	6 物語全体からの意味付け…70	
第3節	返答される独り言	71
	1 動詞「ひとりごつ」…72	
	2 同時代の和歌の中での「ひとりごつ」…74	
	3 薫と弁の尼…76	
第5章	回想を表す心内語——浮舟物語における想起と手習	77
第1節	記憶と想起の諸問題	77
第2節	浮舟の自己	80
第3節	生還後、新たな自己物語を語り出す	82
第4節	新たな自己物語を妨げる過去	83
第5節	語り手が想起を成形する	86
第6節	浮舟と手習行為	88
第7節	過去への抵抗としての手習歌	90
第6章	魂という古代的心象——柏木の大きな変容から	93
第1節	柏木の変化	94
第2節	柏木と「魂」	96
第3節	柏木と「命」	97
第4節	柏木の変化をもたらすもの	98
結び		99

第2部 心情中心主義と文学テキストの解釈

序……………117

第1章 近現代小説における心情中心主義……………118

第1節 近代文学史から……………118

第2節 現代作家によるトラウマ語り……………121

第2章 諸科学や社会における心情中心主義と解釈……………122

第1節 心情中心主義に連なる各種の理論……………122

第2節 社会と心情中心主義……………124

第3節 読書行為における心情中心主義……………126

第4節 心情中心主義に基づく解釈の問題……………128

第3章 反心情中心主義と解釈……………131

第1節 心情中心主義に反する諸理論……………132

1 無意識……………133

2 行動の原因としてのサブリミナル・マインド……………133

3 自由意志の否定……………134

4 身体論……………134

5 拡張する心……………136

6 行動分析学における行動随伴性……………137

7 身体化された心……………138

第2節 解釈への適用……………138

結び……………140

第3部 物語文学の解釈と近代性

序……………149

第1章 源氏物語における近代的性質と前近代的性質……………149

第1節 源氏物語の人間中心主義……………150

第2節 二つの枠組みを揺れる源氏物語……………153

第3節 心をめぐる近代的な側面……………157

第4節 心をめぐる前近代と近代……………159

第5節 天眼・うつり詞・語りの視点の乱れ……………160

第6節 物の怪と人格……………164

1 物の怪とは何か……………165

2 物思いの拡張と他者への侵食……………166

第7節 心情表現はどう読まれたか——『無名草子』の態度から……………168

第2章 近代性の混入(1) 内面・心情中心主義……………175

第1節 近代における評価の源泉……………176

第2節 薫の「内なるもの」と、近代的内面……………180

第3節 心内語の位置付け……………182

1 近代的内面と心内語……………182

2 心の中を直接描くということ……………185

3 近代性を脱したときの心内語……………188

4 若菜上・下巻の実例……………189

第3章	近代性の混入(2)	告白という制度	192
第1節	明石入道の手紙	1 以前の入道の語りと手紙	193
		2 手紙の内容を優先する解釈を生み出すもの	195
第2節	六条御息所の物の怪の語り	1 生霊の場合	197
		2 死霊の場合	201
		[A] 若菜下巻	201
		[B] 柏木巻	205
		3 物の怪という現象を引き起こすもの	206
第3節	柏木巻頭の長大な心内語	1 死へと向かう柏木の身体	213
		2 長大な心内語	214
		3 「新事実」は正しいのか	216
		4 「新事実」の「正しさ」を支えるもの	217
結び			219
第4部	物語文学の〈論理〉と心的因果		229
序			231
第1章	物語の解釈と因果関係		231
第1節	因果関係とは何か		231
第2節	文学テクストの解釈と因果関係		233
第3節	心的因果と文学テクストの解釈		234
第4節	心の否定と心的因果		236
第5節	物語文学と心的因果		239
第6節	物語文学の解釈の現状		240
第2章	源氏物語の罪と心的因果		243
第1節	源氏物語における罪		244
第2節	柏木の罪の意識	1 密通の後、源氏に発覚する前の心	245
		2 密通が源氏に発覚した後の心	246
		3 柏木が抱く罪の意識の特徴	248
第3節	光源氏の罪の意識	1 夕顔事件をめぐって	250
		2 藤壺との密通をめぐって(1)	251
		3 藤壺との密通をめぐって(2)	253
		4 源氏と柏木の罪の意識	254
第3章	物語文学に固有の〈論理〉		256
第1節	近代とは異なる〈論理〉		256
第2節	和歌の発想という〈論理〉		257

第3節	人物の心と観念化された自然	258
1	心情が風景に	259
2	風景が心情に	260
結び		261

(付)	前近代における時間	266
-----	-----------	-----

第5部 国語教育というコンテクストにおける心の位相

序		275
---	--	-----

第1章	学問領域の教科化と文学テキストの教材化	275
-----	---------------------	-----

第1節	教科とは何か	276
-----	--------	-----

第2節	教科と学問領域	276
-----	---------	-----

第3節	国語教科書というメディア	277
-----	--------------	-----

第4節	教材化に働く力学——「古典」というイデオロギー装置	279
-----	---------------------------	-----

第2章	定番教材が物語る文学教育の力学——内面と主体の成立	281
-----	---------------------------	-----

第1節	定番教材とは何か	282
-----	----------	-----

第2節	定番教材に共通する構造	283
-----	-------------	-----

第3節	共通する構造に基づいた定番教材の系譜(1) 小・中学校	285
-----	-----------------------------	-----

1	小学校 「お手紙」「ごんぎつね」「やまなし」	286
---	------------------------	-----

2	中学校 「少年の日の思い出」「走れメロス」「故郷」	290
---	---------------------------	-----

第4節	共通する構造に基づいた定番教材の系譜(2) 高等学校	297
-----	----------------------------	-----

1	高等学校 (共通必修科目) 「高瀬舟」「羅生門」	297
---	--------------------------	-----

2	高等学校 (選択科目) 「山月記」「こころ」「舞姫」	299
---	----------------------------	-----

第5節	文学教育の力学と構造	306
-----	------------	-----

第6節	新安定教材の意味するもの	308
-----	--------------	-----

第3章	文学テキストを「読むこと」の教育	315
-----	------------------	-----

第1節	「読解」の内実	316
-----	---------	-----

第2節	読解における心情中心主義	318
-----	--------------	-----

第3節	読解と特定のスキーマ	320
-----	------------	-----

1	国語教育と道徳性	320
---	----------	-----

2	入学試験問題と社会の「常識」	321
---	----------------	-----

3	教師用指導書と読書感想文	324
---	--------------	-----

4	「善きもの」というスキーマとしての道徳性	326
---	----------------------	-----

5	古典文学教材と道徳性	327
---	------------	-----

第4節	文学教育における心情の扱い	329
-----	---------------	-----

1	特化と加工	329
---	-------	-----

2	読解における「心」の四つの位相	330
---	-----------------	-----

3	「正解」としての過剰に読みとられた「心」	332
---	----------------------	-----

4	古典文学教材に特有の問題	333
---	--------------	-----

5	「読むこと」をどうするか	337
---	--------------	-----

第4章	国語教育というコンテキストから離れた読解の試み……………	340
第1節	変容を自覚していく「私」の語り——魯迅「故郷」……………	341
1 序	341	
2 風景と人物の回想	342	
3 眼前の人物の身体表象	345	
4 「私」とルントウ	348	
5 壁として個としての「私」	350	
6 故郷を離れる「私」の行方	353	
7 結び	358	
第2節	台風の中で語る男——村上春樹「七番目の男」……………	358
1 序	358	
2 事件をめぐる語り	360	
3 絵のもたらすもの	365	
4 「台風の目」の中にいる男	369	
5 語り手の機能	370	
6 男の語る教訓	372	
7 結び	375	
第5章	表象される学習者と心……………	376
第1節	社会における子ども語りと心……………	376
第2節	児童文学における子どもの表象と心……………	378
第3節	教育における子ども語りと心……………	378
第4節	読者としての学習者の表象と心……………	380
結び	……………	381
あとがき	……………	406